

# St. Luke's International University Repository

## 学術活動報告(1994年度)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/299">http://hdl.handle.net/10285/299</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 学術活動報告(1994年度)

### WHOプライマリーヘルスケア看護開発協力センター

#### <経過>

1990年, 聖路加看護大学はWHOプライマリーヘルスケア(PHC)看護開発協力センターの任命を受けた。PHCにおける看護の教育, 実践及び研究を発展させる目的を持ち, 当大学が中心となり, 千葉大学看護学部, 東京大学医学部健康科学・看護学科, 国立公衆衛生院看護学部と協力・連携を取りながら活動をしている。

#### <今年度の活動>

##### 1. グローバルネットワーク会議への参加(7月)

看護に関するセンターは現在世界に29カ所あり, 今回のボツワナでの会議で「互いのネットワーク強化のためのワークショップ」が開かれ, 具体的な戦略等について話し合った。また, WPRO(西太平洋地域)会議も併せて行い「老人ケアに関する共同研究」の今後の進め方等を検討した。

##### 2. 活動報告書(Annual report)の作成・配布(10月)

当センターの年間活動報告の4巻目として, 1993年度の報告書を10月に作成し, 国内外の関係機関, WHOセンター等に送付した。

##### 3. 1995年国際看護学術集会(JANS)への参加企画

学術集会のInformation exchangeのプログラムに参加し, WPROとしてのネットワークを考える機会を持ちたいと計画している。  
(センター長 小島 操子)

### スタッフ教育委員会

スタッフ教育委員会では, スタッフの教育ならびに研究に資する能力の向上を目的に, 教育セミナーや研究会, 講演会等を企画・実施している。1994年度は, 以下のような内容を実施した。

#### 【セミナーシリーズ】

5月31日: 痛みの概念 (水口公信 教授)

10月15日: フリートキング「看護学について、もう一度考えてみよう」(羽山由美子 教授)

1月17日: 最近の情報システムの動向 (菊田文夫 助教授)

#### 【スタッフ研修会】

7月19日: 特別講演「家族へのガンの衝撃と家族サポートの強化」

(米国ワシントン大学 看護学部 フランシス・マルカス・ルイス教授)

12月22日: 研究討論会

操 華子 他: CARE/CARING の概念の再構築 -概念のメタ分析-

萱間 真美 : 産褥・育児初期にある母親の心の健康に関する研究

佐藤 玲子 他: 中央区における高齢者健康調査結果 一次調査の結果およびその後の経過報告

加納 尚美 : 日米における助産婦活動の比較

菱沼 典子 : 腰背部温電法による排便促進について

野地 有子 : 話題提供; WHO QOLの開発について

(スタッフ教育委員会委員長 小松 浩子)

## 第27回公開講座A

### 専門職看護の新たな視点 -コンシューマ主導の発想とマーケティング-

看護の役割に対する期待が、病院内ケアから地域ケアへと拡大を見せる現代にあって、医療の受け手である消費者=コンシューマーとしての患者の権利意識は高揚している。経営者としての看護職の役割の拡大にともない、どのように消費者のニーズを把握し、看護ケア提供システムを展開するかという視点が必要になってきている。そこで、今年度は上記のテーマのもとに平成7年1月14日(土)、15日(日)と2日間にわたって公開講座を開催し、コンシューマ主導の発想と、マーケティングが展開されていった歴史的な背景、および日本における現状と可能性について専門家の講演と、実践でご活躍の方々によるシンポジウム、参加者との討論を企画・実施した。看護教育や臨床の場からの参加者、大学院生などのべ390名の参加者と講師、シンポジストらとの意見交換が活発に行われた。

#### 【講師】

Leann L. Strasen, RN, D.P.A. ナショナル・メディカル・エンタープライズ副社長  
村田 昭治 商学博士 慶応義塾大学商学部教授

#### 【シンポジスト】

村松 静子 日本在宅看護システム株式会社 代表取締役社長  
井部 俊子 聖路加国際病院・副院長・看護部長  
堀内 成子 聖路加看護大学・教授

(公開講座A委員会 委員長 荒井 蝶子)

## 第17回公開講座B

### 高齢者の心の問題 -老後をどう豊かに過ごすか-

公開講座Bは、毎年、地域の方々とテーマを含め会の持ち方について話し合い、地域の方々の御参加を得て開催している地域公開講座である。平成6年は3月11日(金)午後6時より、テーマ「高齢者の心の問題-老後をどう豊かに過ごすか-」、講師は日野原重明学長により行われた。参加者は50名であり、20歳代~80歳代にわたっていた。はじめての方は26名、2回~17回の方が24名と、継続して参加されている方が約半数みられた。感想には、「医学的裏付けをしながら豊になる例を用いて、わかりやすくお話いただいて良かった」、「具体的によく理解できて、大変有意義なお話だった」、「大変ためになり、生きることの証を知りました」、「素晴らしい知識をいただき、ぜひ長生きを心がけたいと思いました」、「もっと沢山のの人に講座の話を教えてあげたい」などがあり、多くの方が大変良かったと述べられていた。講演後、健康についての質疑応答もたれ、地域と大学の交流の場となった。

(公開講座B委員会 委員長 飯田澄美子)

## 海外の研究者との活動

### Dr. William L. Holzemerの招聘について

ホルツマー先生が本学に客員教授として来校されるようになってから、かれこれ6年が経過していると聞く。私は、昨年から大学院の研究法を担当するようになり、93・94年と2回にわたってコーディネートする機会を得た。92年までは、同窓会のミセス・セントジョン基金による招聘とのことだったが、この2年間は幸いにも、日本私学振興財団の高度化推進特別経費から一部補助を得ている。

本学滞在中のホルツマー先生の活動は下記にわたる。

#### 1) リサーチ・クラス

修士課程の講義内容は、研究のプロセス、研究デザイン（記述、相関、実験・準実験）、Outcomes Model、サブストラクション、サンプリング、デザイン妥当性、仮説定立、測定法（信頼性、妥当性）、データ分析と多岐にわたっている。6回のクラスの他に、昨年からの試みで、グループごとに各自の修論テーマに関する相談にも関わらせている。

博士課程のクラスは、学生の希望内容とスケジュールで調整される（去年は5回、今年は3回）。今年は1名だけであったので、研究計画書のアイデアを深めながらのクラスであった。

#### 2) 個人相談

面接の予約をとって、研究のプロセスに関する種々の個別相談で、博士課程の学生および教員がご指導いただいている。

#### 3) 教員・院生のためのリサーチ・プレゼンテーション

4) 学内教員および学外の看護職で構成されるQA研究会（事務局代表、堀内先生）があり、ホルツマー先生との共同研究がここ数年成果をあげて、日本看護科学学会での発表をはじめ、雑誌等に報告されている。

5) 今年は初の試みとして、他大学の院生・修士生を対象に看護研究セミナーを開催した（11月25日、12月9日、10日）。内容は修士課程のクラスを2日間に圧縮したものである。千葉大学、東京医科歯科大学、日本赤十字看護大学をはじめ、東京近郊の大学から62名の参加があった。本学の修士生も9名参加しており、終了時の評価では、今後も是非継続してほしいという声が圧倒的であった。

3週間の滞在は瞬く間に過ぎていくが、ホルツマー先生は合間をぬって、クリスマス休暇で帰られるご家族のためのショッピングや東京の散策も楽しんでおられる。温泉がお好きで、新宿や渋谷の繁華街がお好きで、日本画の収集（とくにヒロシ・ヨシダ?）もしておられ神保町界限はよく行かれるとのこと。この数年ですっかり日本通になられたようである。

（羽山 由美子）

### Dr. Frances M. Lewisの招聘について

ワシントン大学看護学部地域看護学教授のDr. Frances M. Lewisが、7月17日～8月7日の22日間来日された。この招へいの目的は、わが国の地域看護学の理論構築のために、聖路加看護大学、東京大学、高知女子大学のそれぞれの地域看護学教室共同で、日本学術振興財団へ申請を行い助成を受けたものである。聖路加看護大学では、7月19日に、「乳ガンをもつ母親とその家族へのサポート」について、ルイス博士の10年間の研究成果を踏まえて、研究方法を中心にご講演いただいた。また、ルイス博士は大学院生と教員のスモール・グループを対象に、地域看護サービス、ケアシステム、健康教育、患者教育などについても講義とディスカッションをもたれ、参加者は、実践看護に根ざした研究方法について多くの示唆を得た。講義の合間には、ご自身の体験を題材に、研究チームをつくり、多くの看護研究者が育っていった過程や、電子メールによる世界の研究者とのネットワークづくり、研究助成の受け方などの研究生活のノウハウなども話され、我々に感動と勇気を与えられた。

今後、教員や学生の、研修や留学などの交流が発展することを希望されている。（公衆衛生看護学教室）